



機関研究「文化遺産の人類学——グローバル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ」

国際ワークショップ
武器をアートに——モザンビークにおける平和構築の営みを考える

日時：2013年7月13日(土) 13:30~16:30
場所：国立民族学博物館 第4セミナー室
主催：国立民族学博物館
企画：吉田憲司(国立民族学博物館)

モザンビークでは、1975年の独立後1992年まで続いた内戦の結果、大量の銃器が民間に残された。現在、この銃器を農具と交換することで回収し、武装解除を進めるとともに、回収された銃器を用いてアート作品を生み出して、社会の安定化に貢献しようという、TAE (Transformação de Armas em Enxadas / Transforming Arms into Plowshares) 「銃を鋤に」というプロジェクトがすすめられ、内戦後の平和構築のモデルとして注目を集めている。

今回のワークショップでは、作品制作者、フィエル・ドス・サントス氏とクリストヴァオ・カニャヴァート(ケスター)氏、TAEプロジェクトのコーディネーターのニコラウ・ルイス氏、日本でTEAプロジェクトを長年支援してきたNGO えひめグローバルネットワーク代表の竹内よし子氏を招き、それぞれの活動についてご報告いただいた。平和構築に向けてアートはどのよ

うな力をもっているのか。また、平和な世界を築くために私たちにいま何ができるのか。それを考える機会となった。

研究フォーラム
金融のなかの贈与——金融と人類学の交差点

日時：2013年7月14日(日) 10:30~16:15
場所：国立民族学博物館 第4セミナー室
主催：国立民族学博物館



近年欧米で著しく進展した金融人類学は、ウォール街や中央銀行などを新しい民族誌的研究の対象として提示するとともに、方法論的にもさまざまな実験を行うなど、現代人類学で最も活発な議論が展開されている分野のひとつとなっている。また、金融市場の研究を通して貨幣や贈与と交換など経済人類学の古典的な問題も再考されてきた。

このフォーラムでは、宮崎広和(コーネル大学)を中心に、桜井英治(東京大学)、アナリス・ライルズ(コーネル大学)、神山直樹(外資系証券会社)を発表者に、山本真鳥(法政大学)、深田淳太郎(一橋大学)、中村尚史(東京大学)をコメントーターに迎え、長年オセアニア民族誌を中心に蓄積されてきた贈与と交換論におけるさまざまな知見を踏まえつつ、金融の分析に文化人類学的視点を提供した。同時に、金融危機など現代金融市場をめぐる諸問題を



射程に入れた包括的な経済人類学の構築が試みられた。

博学連携教員研修ワークショップ2013 in みんなく
学校と博物館でつくる国際理解教育——センセイもつくる・あそぶ・たのしむ

日時：2013年8月6日(火) 10:20~17:00
場所：国立民族学博物館(講堂、セミナー室、展示場内)
共催：国立民族学博物館・日本国際理解教育学会

国際理解教育とは、多様な問題を抱え続ける世界において、「多文化共生の理念」を育み、平和で公正な地球社会づくりに「参加する態度」を養うことを目的としている。本ワークショップの目的は、国立民族学博物館(以降民博)展示場や所蔵資料を活用して、国際理解教育における博学連携の意義や可能性をさぐることにある。

ワークショップの第1部は、中山京子(帝京大学)の基調講演と、MMP(みんなくミュージアムパートナーズ)による「わくわく体験 in みんなく」の取り組みの紹介、民博教員によるミュージアムツアーを行った。第2部では、7つのワークショップを実施した。講師は、教育機関教諭と民博教員が協働で担当した。各内容は、演劇の手法による展示利用、フェアトレードと国際問題、「みんなく」の活用事例、豊かな「ことば」教育の教材開発、アイヌのものづくりとiPadの活用、日中韓相互理解の「すごろく教材」、歌と踊りによる先住民文化理解と多岐にわたった。教育機関教諭が多数参加し、関心の高さがうかがわれた。

